

くらし kurashi

希少がん「中皮腫」知って

松山で「セミナーin四国」



医師や患者らが希少がんの治療や病院の選択について意見を交わした「中皮腫セミナーin四国」のディスカッション

患者増加傾向 保障制度手続き相談を

年間発生率が人口10万人当たり6例未満のがんの啓発セミナー「希少がん みんなで語り合おう」第1回中皮腫セミナーin四国がこのほど、松山市南梅本町の四国がんセンター患者・家族総合支援センター「暖だん」であった。医師や医療ソーシャルワーカー(SW)、患者らが、200種近くある希少がんの一つ「悪性胸膜中皮腫」に関する治療の現状や課題を語った。

講演で、四国がんセンター臨床研究センター長で呼吸器内科医師の上月稔幸さんは、原因の多くはアスベスト(石綿)で「発症までに時間がかかるため、近年でも患者数は増加傾向で、ピークアウトしていない」と説明。治療は抗がん剤や「免疫チェックポイント阻害薬」を用いるほか、ステ

ージによって手術なども検討されるという。四国がんセンターがん相談支援センターの医療SW大西明子さんは、中皮腫患者の社会保障制度として、仕事中に石綿の粉じんを吸った場合の労災補償や石綿健康被害救済制度について解説。それぞれ申請窓口や書類が異なるため「手続き

と呼びかけた。講師らのディスカッションでは、病院や治療の選択について「専門医などは四国がんセンターで検索することもできる。信頼できる情報を基に判断を」「経験豊富な医師は点在しており、治療が遠距離になると経済的にも負担」などの意見が出た。

が複雑で、高齢の患者さんや家族にとってハードルが高い」とし、主治医や病院の相談窓口、県内15病院に設置する「がん相談支援センター」の活用を勧めた。NPO法人中皮腫サポートキャラバン隊(大阪市)は、対面の交流会やオンラインサロン(毎週水曜日)を開き、患者に役立つ情報を動画でも配信している。平田勝久副理事長は「患者も情報も少なく、孤独や絶望を感じて不安になってしまいがち。病院や薬について発信し、社会保障制度の迷ったら連絡してほしい」と

悪性胸膜中皮腫 胸壁の裏側や肺の表面を包む胸膜の中皮細胞から発生する腫瘍で、主な症状は胸の痛み、せき、大量の胸水による呼吸困難など。建材や断熱材として広く使われた石綿の粉じんを吸い込んだことなどが原因で発症する。国立がん研究センターがん対策研究所によると、2016～18年に県内で発症した人は計63人。

(梅林恭子)